九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

バートランド・ラッセルの教育思想(3) : 価値の主観性について

高田, 熱美
九州大学医療技術短期大学部

https://doi.org/10.15017/117

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 8, pp.7-16, 1981-03-25. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

バートランド・ラッセルの教育思想（3）

— 価値の主観性について —

高　田　熱　美

The Educational Thought of Bertrand Russell (3)

— On the Subjectivity of Values —

Atsumi Takada

序

人間はすでに今在る自己から何か自己以外の自己を越えたものへ成りたいと願う存在である。Bertrand Russell はそうした自己を越えたものを終生求め続けた人間であった。「人間は，ある非常に重要な点で他の動物とは異っている。それは，人間が，いわゆる無限の，決して十分に満たされえない，天国においてさえ休息を与えられえないであろうような，ある願望をもっているということである。[1)]」。Russellはそれを「無限の動因（the infinite motive）[2)]」と言う。この「無限の動因」が人間を越えたものを求めさせる。その意味で人間は本質的に自己超越的存在であるといえる。

この人間理解はRussellの教育目的にも現われていた。彼は，教育の目的において，永遠の真実という人間を越えたものを反映する「個人」を第一位においたのである。生涯変らなかったこの目的は『社会改造の諸原理』（1916）に明解に示されている。「世界は生を豊かにする哲学や宗教を必要としている。しかし，生を豊かにするためには，たんなる生以上の何かを尊重することが欠くべからざることである。生にのみ捧げられた人生は何ほどの人間的価値をも有さない動物的人生であって，倦怠とすべては空しいという感情から永遠に人びとを守り抜くことができないのである。もし人生が十分に人間らしくあるべきだとすれば，それは何らかの意味で人間の生活の外にあるように見える目的に仕えるものでなければならない。それは，神，真理，美といったような，非個人的で人類を越えた目的なのだ。生を最も豊かにする人びとは自分たちのために生活をもつことはない。彼らはむしろ漸次的な体現と見えるもの，永遠な何ものかをわれわれの存在の中にもたらすことを目指すのである。[3)]」

永遠なものを想い愛することが「知恵の鍵[4)]」であり，理性と希望，真理と愛とによって人が生きうる土台であるのだ。教育は終局的にはこのような永遠を志向して生きる人間を目標にせねばならない。

それでは，どのようにして，これは可能になるのであろう。何を教えれば，どういう方法を用いればこれは実現できるのであろう。

ともかくも教えられるものは価値あるものでなければなるまい。価値のないものも人は教えることができるかもしれない。けれども本来，教育というものは価値あるもの，そのなかでもとくに大切なものを選択して教えることであろ

九州大学医療技術短期大学部

う。その意味で，教育と価値とは不可分といえるのである。

ところで，価値のなかでとくに人間の生活に重要なものは倫理的価値であろう。多くの価値あるものは倫理的価値へ収斂するとさえいえる。たとえば，古代宗教のモーセの黄金律も，倫理的価値を極めて鮮明に表現したものということができる。これは，人間が神を畏れ義によって生きるための基本的価値であった。われわれが論究するRussellにおいても，価値は倫理的価値を中心にしていた。もちろん，こうした倫理的価値は教育によって取上げられ，教えられるべきものであろう。しかるに，Russellは『追憶の肖像とさらなるエッセイ』（1956）のなかで次のようなことを述べている。「私は若いとき善と悪の客観性を信じることでG・E・Mooreと一致していた。だが，『教義の空論』という書物のなかにあるSantayanaの批判は私のこの考えを放棄させた。私はこの考えがないと彼のように気持よく落着いていることができなかったのであるが。[5]」

Russellが考えたように倫理学の主題あるいは根本概念は善と悪であるにちがいない。[6] したがって倫理的価値の中心は善と悪であるということができる。ところがRussellはそれの客観性を信じないといっているのだ。それではいったい，客観性を有さぬものを教えることができるであろうか。もし教えることができるとしても，そういう教育は正しいといえるであろうか。客観性を有さないもの，いわば自分の好みや趣味，私見を教えることが教育であるのか。もしそれが，悪い趣味や狭い私見であれば，それを教えられる者はどうなるのであろう。

しかしながら，Russellは，善悪の客観性を信じないと語りながら，彼自ら学校を設立し，教育をさえ行なってきた。さらに反戦・平和を叫び，政治の改革を唱えつづけてきた。これはどうしたことであるのか。ここではこの疑問を解かねばならないと思う。そこでまず，教育されるべき倫理的価値の客観性および主観性の問題を論じ，次にそうした価値の教育可能性ないし教育の方法を論究することにしたい。

I　倫理的価値の客観性

Russellは97才まで生きた。その間，彼は一貫して社会に関心を抱き実践活動を続けた。最近ではベトナムにおけるアメリカの戦争犯罪を告発した「ラッセル法廷[7]」（1967）にそれを見ることができる。これは，Russellの没年が1969年であるから，彼が96才のときである。その活動は壮烈の一語に尽きる。もっとも，長い人生のなかで彼の思想と哲学は揺れ動き変転した。とくに倫理的価値の哲学がそうであった。ときには価値の主観説が語られたが，その間もRussellの実践への意欲が消えることはなかった。

すでに触れたように，問題は価値の主観説に立つ人間が他者に理解を求め，同意を要求するということは可能なのかということである。このことについて，たとえばLewisは幾分感情をこめていっている。「われわれは，Russellが道徳にこのような主観的態度をとるのは真面目でないと考えてはならない。かれは一人の哲学者として倫理的判断にはどんな合理的な根拠も発見しないがゆえにこの立場をとる。」。だが，「戦争，原子爆弾等々のような問題に関して，かれは雄弁にかれとともに信じ，かれとともに行動するようにわれわれのすべてに力説する。この倫理的情熱の背後には明らかに人道主義的な諸目的は万人にとって客観的に正しく，真理であるという確信が存在する。われわれにとって驚きであるだけではなくてまた惜しむべきは，この首尾一貫性のなさである。[8]」

Russellはかって次のようなことを述べたことがある。「迫害の古い形態の衰微に満足して喜ぶよりも迫害の新しい形態に抗することこそ，科学する人たちや科学的知識を大切にする人たちすべての明白な義務である。そしてこの義務は特定の教説を好むことによっては軽くならないのである。そのような教説を支持することによって迫害が起こるのである。[9]」。これを踏まえてJagerは，Lewisと同様に，Russellに疑問を呈している。「しかしながら，もし私がナチスや共産主義者たちが支配する世界を見たい

と望みかつ希望するとすれば，どうして私はそれを達成する方法に抗するこの"明白な義務"をもつことができよう。それに抗することはたしかに"Russell"の明白な義務であったし彼はそうした。しかし彼は，科学を大切にするとはいっても，民主制の誤りや偏見を除去することをさらに大切にする人びとに対して，この義務を割当てる根拠を自分から奪ってしまったのだ。迫害を支持する教説を私が"好むということ"は，まさしくRussellの根拠に立てば抗するべき私の義務を軽くすることなのである。[10]」

このように，Russellに対する疑問や批判は少なくない。それゆえ，ともかくRussellの倫理的価値論をその生涯にわたる変動をたどりながら論究することにしたい。[11]

Russellは思想形成の初期・1898年までは当時哲学的地位をほしいままにしたHegel哲学の影響下にあったという。[12] しかしそれ以後Russellは親友Mooreの影響もあってHegelの教説に反駁することになった。[13] とりわけ，倫理的価値の学説についてはMooreの働きかけが大きかったといえる。たとえば，Russellの論文「倫理学の原理」(1910)はMooreの『プリンキピア・エチカ』(1903)を基礎にして書かれている。そこでRussellは，倫理学の根本概念である善と悪について，Mooreと同じような結論を下していた。「これら(善と悪)の観念は，明らかにわれわれのより複雑な観念の中の最も単純な要素を構成する観念のうちに在るものであって，それゆえ分析されたり，他のさらなる単純な観念から構築されたりすることができないのである。善ということであなたは何を意味しているかと人からたずねられたとき，答えは言葉の定義の中には存しないにちがいない。[14]」

Russellは善が定義できないというのである。定義できないということは，「本来的な善および悪の概念が他の諸概念から全く独立していて，あるものの善さや悪さはその他の性質たとえばその存在あるいは非存在から推定できないのである。それゆえ，実際に起こることは起こるべきことに対して何の関係も有さない。[15]」ということである。だから，「われわれは存在するものの研究から善や悪が何であるかについての結論を推定することはできない。[16]」「自然の過程は何が善であり悪であるかの決定には無縁である。[17]」のだ。それゆえ，善は存在・事実から導かれるわけではない。したがって自然的性質をもたない。かくて，善は欲求されるものと同じではない。善いとされるものが同時に欲されているものであることがあるとしても，それは偶然であるにすぎない。

にもかかわらず善は決して主観的ではない。むしろ他のあらゆるものから独立しているがゆえに他の何ものからも干犯されることなく，その崇高な地位を保っているのである。「こうして，善と悪とは円いことや四角であることと全く同様に，われわれの意見から独立して対象に属する性質である。そして二人の者が，あることが善いかどうかについて意見を異にするとき，二人のうちの一人だけが正しいのである。もっとも，いずれが正しいかを知るのはきわめて難かしいこともあろうが。[18]」。

善は客観的であって，形而上学的な意味で実在するといえる。そうであるからには善は知られうるものであろう。たとえ善が定義できないとしてもである。けだし，客観的に実在するものは，あまねく人びとに理解され分かちもたれうるものでなければなるまいから。現実にはともかくも可能性としてはそうあるものであろう。

では人びとは善をいかにして知るのであろうか。Russellは「書簡」(1902)のなかで早くも功利主義を批判して次のように述べている。「われわれは直覚主義(Ituitionism)すなわち直接的直覚こそが道徳的前提の唯一の源泉であるという学説の一般的基礎をうけいれる。[19]」と。さらに『哲学の諸問題』(1912)においても，「論理的でない先験的な(a priori)知識の最も重要な例は倫理的な価値に関する知識であろう。[20]」という。「たとえば，われわれは，幸福は不幸より知識は無知より善良は憎悪より望ましい，などと判断する。このような判断は本来少なくとも直接的にして先験的である。[21]」。「先験的」とは，Russellの場合，経験によっ

て証明もされなければ，論駁もされえない．ということであって，そうした知識の典型は，倫理の究極的な価値としての善である。それゆえ善は人びとの直覚によって把握するしかないのである。

直覚とは何であろう。それは善を見る人間の働き・力であろうか。たとえば，Schaftesbury やHutchesonにおけるような，すべての人間に具有されている直覚能力，いわばMoral Sense であるのか。あるいは，Smithにおけるような道徳感情（Moral Sentiment）であるのだろうか。もしくは，Sokrates，Platon に見られるような，形而上学的な善のイデアの観照そのもの，したがって，突如としてつむじ風のように神秘のヴェールをはいで魂の転回を結果する出来事であるのか。

Russell は，直覚が何であり，はたしてそれが教育・形成されうるものであるのか，教育されうるとすればいかにして可能か，といった問題に触れてはいない。実は，Russell は，究極的な意味で善は定義できない，善は欲求，事実から独立していて，理知の論証を越えた超個人的なものである，ということを語るために直覚という概念を導入せざるをえなかったといえる。それゆえ，直覚とはそもそも何ものであるかといった問いは，Russell にとっては二次的な問いにすぎないのだ。

それでは，直覚の対象である客観的な善とは，一体何であるのか。善がひらめきにもにた直覚の対象であるということは善が全く知られえないということではないのだ。ある具体的な極限的状況においては，いずれの行為が善にかなうかを判断し，それを説明するのは困難であるとしても，普段われわれは善について考え，善であるものを語ることができる。ただわれわれは語っている善いものが究極的に何であるかと問われたとき答えることができないということだけなのだから。そのことをRussell はこのように述べている。「定義できないが理解している観念，証明することはできないが知っている前提から出発して，われわれは複雑な事柄をそのより単純な要素から再び作りはじめるのだ。[22]」と。こうしてRussell は自らが理解し，知っているという善について語る。彼の書簡（1902）ではこうである。「……私は快楽と苦痛とは知識，美の認識と観想，ある精神の本質的卓越さに比べればあまり重要ではないと判断しています。[23]」。「概して最良の人生とは，人間の事柄について真に考えかつ高貴に感じる人生であり，さらには美および深遠な真理の世界を冥想する人生であるように思われる。[24]」。「しかし私はそのような冥想がおよそ幸福に役立つとは思わない。[25]」と。

Russell は，善を感覚的な快苦，心的な快苦や幸福ではなく，真実に生きること，真理の観想にあると見ていた。それゆえ彼は自らの見解を「反功利主義者の意見[26]」と述べたのである。ただし彼は客観的に正しい行為を「最も幸運な行為[27]」と定義して，それは「悪以上に大きな善をうみ出し，善以下に少ない悪をうみ出すものだ。[28]」という。つまり，「客観的に正しい行為とは最も幸運である確率の高い行為[29]」，したがって「それはあらゆる可能な行為の中で最良の結果を確率的にうみ出すような行為である。[30]」といっている。この点でRussell はやはり功利主義者である。また，Ayer の Russell 評も同様で，「（Russell は）さまざまのちがったかたちの満足の質のあいだに倫理的な区別をもうけないことで一貫した功利主義者である。[31]」という。

もっとも，善と幸福，善と快楽とを同一視しないという点で，Russell は快楽主義的功利主義者ではなく，Moore とひとしく理想主義的功利主義者というべきであろう。そこでJager が「……Mooreおよび彼自身のPlaton的傾向にしたがって，Russell は形而上学同様に倫理学において実在論者（realist）であった。同じく適切な名称といえば客観主義者（objectivist）であろうし，さらに正確な名称は直覚主義者（intuitionist）であろう。しかしさらなる記述的な名称は理想的功利主義者（ideal utilitarian）であろう。[32]」とするのもうなづけるというものである。

ところで，直覚的に知っており理解している

とされる善が，はたして真に善であるかとRussellが問われたとき，彼はそれに正しく答えるすべを知らないであろう。善はPlatonが考えたように天才の透明な直覚・理性によって把握されるにせよ，一般市民に内在する道徳的感情や直知能力によって知られるにせよ，それらはいずれも知の探求による根拠づけを放棄するのである。したがって善は，個人の，とりわけエリートの確信に依拠するか，日常市民の常識（common sense）に委ねられることになる。事実，晩年にRussellが核戦争の脅威に対抗して人びとに訴えたのは常識によってであった。[33] その意味では「直覚主義は理性との関わりを保ちながらも，道徳の基礎を非恣意的な原理に求めることにおいてあまりにも諦めが早すぎる。[34]」というほかはない。

それでは，善の直覚はいかにして可能となるのであろう。これは，Platonが『国家』の第六・七巻で論じたように教育の根本的な課題である。だが，当時のRussellはHegelの一元論から離れて数学基礎論を完成させていた。そうした事情もあって，Russellは善の直覚について探究する気はなかったのであろうし，そのことを問題にもしていなかったのであろう。もっとも，推論すれば次のようなことはいえると思う。善の直覚とは，主体である個人が客体である善を突如として認識するということであって，その構造は主体と客体との第三人称的な二極構造である。ここでは，ひとりの人間と客体の善とが向かい会い，それを見るのは人間の主体の側の卓越した直覚力か本来人間に具わっている感知力であろう。それゆえ，ここでは，善なるもののあるいは真理そのものからの働きかけが欠如している。つまり，人間・主体と善・客体との二人称的な相互関係が欠けているのだ。しかも，人間の主体と主体とがつくり出す世界の，共存と相互作用の可能性が予定されていない。このため，善の直覚に，他者がどれだけ，いかに働きかけうるかという教育の前提が不明なのである。

II　倫理的価値の主観性

多くの疑問を抱かせながら，Russellは思索と行動に人生を生き抜いてきた。これらの疑問を踏まえて，Russellという人間の「善」についての考えをいましばらく追跡することにしたい。

1913年のことである。Santayanaは『原理に関する風論』の中でRussellの倫理学をとりあげて批判した。　すなわち，「（善は定義できないという）この立派な，一やや軽いとしても一知覚にもかかわらず，それからRussell氏は彼の先にいるMoore氏と同様に途方もないドグマを導出した。善は定義することができないので，彼はそれを現実的であると想定したのだ。[36]」「善という性質が定義できないということはひとつの主張であって明瞭であるが，この性質の存在が絶対的であるということは別の主張であり，それは驚くべきことである。[37]」「究極的な善は選ばれ，発見され，想われるものである。倫理が依拠する究極的な直覚は論議できないのであり，それは，われわれが決意して語る意見ではなくて，われわれが感じる好みである。[38]」

Santayanaの批判にはうなづけるものがある。「善は定義できない」ということが正しいかどうかは別としても，「善が定義できない」ことから善は絶対・普遍妥当的であるという結論を導き出すことは不可能であろう。

RussellはSantayanaの批判に素直に従った。彼は『自伝』の中でそれを語っている。「（道徳的な）性質の議論にたいしては純粋に合理的な結論というものは全然ありえないのである。もしある人間が地球は球体をなしていると信じ，他の人間がそれは平盤であると信じているのであれば，彼らは一緒に航海に出発してこの問題を納得のいくように決めることができる。しかしもしも，或るものがプロテスタントを信じ，他がカトリックであるばあいは，合理的な結論に達する方法というものは何一つ知られていないのである。このような理由からわたくしは，道徳的な『知識』というものは一つもないとい

う点においてSantayanaと意見を同じくするようになっていたのである。[39]」。こうした立場の変化は『哲学概論』においてもさらに明解に述べられている。すなわち，「『善』とは定義できない概念であって，われわれはそれ自体において善いものどもについての先験的な一般命題を知るのだ，という説が，たとえばG・E・Moore博士などによって主張されている。……私もかってはこの見解をとっていたが，Santayana氏の『教義の空論』の影響もあって，これを放棄するに至った。現在私は善と悪は願望から派生すると考えている。[40]」。

善が定義できないということから直ぐ直覚説を捨てて主観説に立つというのは，観点の飛躍であって，学理論的とはいえないが，ともかくもRussellは善の主観説に立つことになった。そのことを『宗教と科学』（1935）は明瞭に述べている。「『価値』に関する諸問題 — すなわち，そのもたらす結果とは独立にそれ自体において善いものあるいは悪いものについての諸問題 — は科学の領域の外にある。これは宗教の擁者たちが力説するとうりである。この点で彼らは正しいと思うのであるが，私は彼らが引き出していないもうひとつの結論を導いている。それは，『価値』に関する諸問題は全面的に知識の領域の外にあるということである。いわば，あるものが『価値』をもつとわれわれが主張するとき，われわれは自分自身の感情を表現しているのであって，われわれの個人的な気持の如何にかかわらず真であるような事実を表明しているのではない。[41]」。「ある人が『これはそれ自体において善い』というとき，彼はちょうど『これは四角である』とか『これは甘い』などという場合と同様に，ある命題を主張しているように見える。しかし，これは誤りであると私は信ずる。[42]」。そこで，「私が主張している理論は，価値『主観主義』といわれる学説の一形態である。この学説は，二人の者が価値についての見解を異にするばあい，何らかの種類の真理について見解の不一致があるのではなく趣味の相異があるにすぎない，ということを主張する。[43]」。「価値に関する見解の相違を解決する方法は，想像さえもできないのであるから，結論は，見解の相違は趣味の相違であって，何か客観的真理に関する相違ではないといわざるをえない。[44]」

善が定義できないということを，Russellは善が論証の対象になりえない，認識・知の外にあるもの，と見て，知の外にあるものは説明できない主観，好み，趣味であり，それゆえ価値は感情の表現であるとしたのである。

価値が認識の外にあるから主観的であるということについては，それへの疑問を留保しておくとしても，主観的なものが感情であるとされるのはどうであろうか。

価値の非認識説はイギリスではすでにHutcheson やHumeに見られる。[45]「である」で示される命題とちがって，「べきである」で示される命題は知・認識ではなく感情によるものだとHumeは断言した。しかしHumeは感情によるものが主観的だと語ったわけではない。Humeの親友であったSmithに至っては，感情は本源的な人間自然であり，人間であることの客観的土台と見られている。[46] しかしRussellはどうであろう。Russellは「価値は主観的であり，その表現は情緒的である。[47]」というのであろうか。価値の表現が情緒的であるということは，情緒的なものは主観的であるということと同じにならないか。価値主観は必然的に情緒的表現になるというのか。

論理実証主義者たちはこれをラディカルなかたちで強調した。倫理的判断は「純粋に感情の表現であって，それ故真偽のカテゴリーのもとにはこないのである。[48]」。したがって，「≪価値の問題について論ずることは不可能である≫という結論が我々の理論からも生れてくることは明らかである。[49]」とAyerは主張した。実は，「倫理学の言語的表現は言明ではない。それは指示命令なのである。指示命令とは真と偽とも分類のできないものである。[50]」のだ。

Russellは論理実証主義の形成には積極的に加担はしなかったが，これと同じ発言をしているわけである。だから，ここでは感情の値打は下げられてしまった。感情が倭少化したという

こともできる。感情は人間の本源的自然から偶然で，環境に左右される即事的な情緒になった。

こうした善の主観・情緒説に対する批判は多い。たとえば，意論論の研究者たちは，Russellをはじめ論理実証主義者たちは意味あるものについての理解が浅くて狭い，といって批判した。それだからこそ，価値に関する言説は情緒や欲望の表現，涙と笑い，つぶやき，あるいは悪態などの内心の動きのきざしにすぎなくなってしまうのだという。[51)]

Ⅲ 行為の普遍的基礎づけ

Russellは，価値の主観説に立ってからも，価値が対立・錯綜している現実世界への働きかけを止めなかった。倦むところをしらず彼は発言し行動したのである。たとえば，実験学校（Beacon Hill School）の設立（1927），そして実践的著書の相次ぐ発行がそうである。著書については主だったものだけでも次のようなものがある。『何故私はキリスト教徒ではないか』（1927），『懐疑論集』（1928），『結婚と道徳』（1927），『幸福論』（1930），『教育と社会体制』（1932），『怠惰への讃歌』（1935）。

価値の主観説を採っているからといって，自己の価値観を表現したり，人間の諸問題に発言したりしてはならないということはない。また，価値的なものの実現をはかってはならぬという理由もない。価値の主観論者も，その価値について語り，実践することができる。この点で，価値の主観説に立った後のRussellの発言と行動そのものを封じて，否定するのは正しくない。

価値の主観説に立ったRussellは『宗教と科学』のなかで次のように述べている。「もしいま，ある哲学者が『美は善である』というなら，彼のいうことは『すべての人が美しいものを愛するように（would）』か『私はすべての人が美しいものを愛することを望んでいる。（I wish）』という意味であると私は解する。このうちの前者は主張しているのではなく希望を表明している。すなわち，それは何も主張していないのであるから，そのためのもしくはそれに反対する証拠が存在すること，あるいはそれに関して真理や虚偽を所有することは論理的に不可能である。[52)]」

Russellにとっては，願望（desire）を表わしているが，何ものも主張していない前者の文章こそ倫理学に属するものである。これに対して後者の文章は単なる願望法ではなく陳述を為している。これは哲学者の内なる心的事実に関わっている。これは，その事実が真に存在しているかどうかによって反駁されるであろう。このことをRussellは『権力』（1938）のなかでわかりやすく語っている。「私は前に（『宗教と科学』のなかで）内在的価値の判断は主張としてではなく，人類の願望（desire）に関わる願望の表現として解釈されるべきだと言ったことがある。私が『憎しみは悪だ』と言うとき，本当は『憎しみを感ずる人がないように』と言っているのである。私はいささかも主張しているのではない。私はある種の希望を表現しているにすぎない。[53)]」

倫理的価値を願望や希望の表現とするとき，Russellの発言と行為は制約をうけるのではないか。倫理的価値は，敵対し反目し合う諸力が渦巻く世界の中で，戦いとられるものであろう。そこでは「汝為すべし」「汝為すべからず」といった義務・命令・禁止が叫ばれるはずである。だから，「憎しみは悪だ」と語る場合，それは「憎しみを感ずる人がないように」というだけではなく「憎むな！」という意味をも込めているはずである。それゆえにこそ「憎しみは悪だ」という命題が現実の中で生きた真迫性をもつことになる。これは，私の他者に対する希望以上の，要求と主張だといってよい。

事実，Russellは現実の世界では人間の生すなわち価値について希望を表明するだけではなく，要求・主張し，辛らつに批判し，かつ義務を説き，非難し，論駁し，戦ってきた。この現実世界に当面したとき，Russellが書斎の中での研究で示した論理的帰結は，看過されてしまう。

考えてみれば，希望と主張との間に大きな差

異はないはずである。Russell は，希望は主観に，陳述 — 主張は客観に属しているものであるから，主張は論理ないし証拠によって反駁できるものだと考えた。しかし，そうした陳述でさえも最終的には反駁できるわけではないのだ。たとえば，相対する点AとBの最短距離は直線であるという陳述は論証も反駁もできないのだ。われわれはそう見るべきだと要求するか，それ以外の見方はしないで欲しいという外はないのだ。

Russell は，論理において希望と主張とを統合したいと切ないほど思ったにちがいない。しかし彼は両者を分断したまま現実に発言し，行為による働きかけを続けてきた。矛盾しているのだ。Russell の論究は認識における主観主義と客観主義との対立を露呈しているのだ。これを見ると，われわれはHume を思い起こす。Ayer も語ったことであるが，倫理および認識論においてRussell と Humeは近いのである。[54]

想えば，Russell とちがってHume は，どちらかといえば理知よりも感情に正しさを見た。客観 — 知識のあいまいさに対して，Hume は感情のゆるぎなさを信じていたようである。もっとも，あらゆる知識に懐疑の眼を向けたHume は，結局，理知をも感情をも懐疑の渦の中に巻き込んでしまった。しかし，こうした懐疑にもかかわらず，Hume は現実に発言し，行動してきた。その根底に，たんなる理知の懐疑を越えて流れている人間自然（Human Nature） — それは理知と感情を統合したもの — への信頼があったからであろう。つまり，Hume には，いかに主観的，非論証的に見えようとも，宏大な人間自然がその正当な働きを誤ることはないという，ある意味では楽観的な確信があったのである。これは人間のコモン・センス（共通感覚）への確信ともいえる。イギリス特有の思惟というべきか。

われわれはRussell にもそれを見ることができる。倫理が示す「希望は，出来事としては個人的であるが，それが欲するところは普遍的である。[55]」。「われわれの欲求に普遍的な（universal）重要性を与えるように思われること，これが倫理学の仕事である。[56]」。「倫理学は，……真であろうと偽であろうと何らの陳述をも含まず，ある種の普遍的欲求（desire）すなわち人類一般に関わるようなものから成り立っている。[57]」。これらのRussell の発言からも明らかであるように，Russell は「人類共通の欲求[58]」（the common desires of mankind）を認めているのだ。したがって，Russell にとって倫理的価値は普遍的なものと個人的（personal）なものとの問題を論ずるのだ。たしかにそれは真か偽かの問題ではない。しかし，普遍的なものが真偽の陳述ではなく希望の表明であるからといって，それが主張できないはずはない。事実，Russell は現実社会に向かって普遍であると彼が見たものを語り主張した。人間自然の普遍性に対する確信は，Russell のあらゆる思惟と行為の底流にあって，その楽天的ともいえる確信が激情的な行動を呼び起こしたといえる。

もちろん，こうはいっても，普遍的と個人的，客観的と主観的，規範的と記述的な命題について，Russell の学理論的な探求が完成しているわけではない。この問題は依然として未解決のままである。この問題にRussell は答えねばならぬ。このことの検討は稿を改めて論ずることにしよう。

注

1） Russell. : Human Society in Ethics and Politics, Allen & Unwin, London, 1954, P. 161
2） ibid, P. 161
3） Russell. : Principles of Social Reconstruction, Allen & Unwin, London, 1916, P. 245
4） ibid, P.246
5） Russell. : Portraits from Memory and Other Essays, Allen & Unwin, London, 1956, P. 90
6） Russell. : Philosophical Essays, Allen & Unwin, London, 1910, P. 15

7) ベトナムにおける戦争犯罪調査日本委員会編『ラッセル法廷』人文書院．1967．参照

8) Lewis, J.：Bertrand Russell — — Philosopher and Humanist — Lawrence and Wishart, London, 1968『バートランド・ラッセル』中尾隆司訳 ミネルヴァ書房 1971, P. 114

9) Russell.：Religion and Science, 1935, Oxford University Press, Maruzen Company Limited 1956, P. 251

10) Jager, R.：The Development of Bertrand Russell's Philosophy. Allen & Unwin, London, 1972 P. 477

11) こうした論究は私自身すでに行ったことがある。（「B・Russellにおける倫理と教育の問題」九州大学教育学部紀要．昭和44「教育における倫理的価値について」九州大学医療技術短期大学紀要．昭和50．参照）
さらに．Jager やAyer にもそれを見ることができる。
しかし．ここでの論究は教育の可能性という視点から進められる。結果は．私の過去の論文より精密かつ整理されたものになるであろうし．後の二者の論調とは異なったものになるであろう。

12) Russell.：Portraits from Memory and Other Essays, P. 21, 40

13) Russell.：My Philosophical Development, Allen & Unwin. London 1959, P. 54

14) Russell.：Philosophical Essays, P. 16

15) ibid, P. 58

16) ibid, P. 23

17) ibid, P. 24

18) ibid, P. 21

19) Russell.：The Autobiography of Bertrand Russell, 1872 - 1914, Allen & Unwin, London, 1967, P. 158

20) Russell.：The Problems of Philosophy, 1912, Oxford University Press. Maruzen Company Limited, 1959, P. 76

21) ibid, P. 76

22) Russell.：Philosophical Essays, P. 15

23) Russell.：The Autobiography of Bertrand Russell, 1872 - 1914. P. 157

24) ibid, P. 159

25) ibid, P. 158

26) ibid, P. 159

27) Russell.：Philosophical Essays, P. 30

28) ibid, P. 30

29) ibid, P. 31

30) ibid, P. 59

31) Ayer, A・J.：Bertrand Russell, The Viking Press, New York, 1972, P. 127

32) Jager.：The Development of Bertrand Russell's Philosophy, P. 463

33) cf, Russell.：Common Sense and Nuclear Warfare. Allen & Unwin, London, 1959

34) Peters, R. S.：Ethics and Education, Allen & Unwin, London, 1966, P. 107

35) Santayana, G.：The Philosophy of Bertrand Russell, In：Winds of Doctrine, P. 138 - 154, J. M. Dent & Sons, London, 1913

36) ibid, P. 140

37) ibid, P. 141

38) ibid, P. 144

39) Russell.：The Autobiography of Bertrand Russell, 1944 - 1967, Allen & Unwin, London.『ラッセル自

叙伝』Ⅲ．日高一輝訳．理想社　昭和48 P. 31

40) Russell.：An Outline of Philosophy, Allen & Unwin, London, 1927, P. 238

41) Russell.：Religion and Science, P. 230 - 231

42) ibid, P. 235

43) ibid, P. 237

44) ibid, P. 238

45) cf. Hutcheson, F.：A System of Moral Philosophy. 1755, Vol. I, P. 58, P. 58

Hume, D.：A Treatise of Human Nature, Reprinted from the Original Edition, in Three Volumes, Ed by Selby - Bigge, M. A, Oxford, Clarendon Press, 1928, P. 458, 469 - 470

46) cf. Smith, A.：The Theory of Moral Sentiments, 1759

47) Jager.：The Development of Bertrand Russell's Philosophy. P. 477

48) Ayer, A. J.：Language, Truth and Logic.『言語・真理・論理』吉田夏彦訳　岩波　1955 P. 135

49) 同　上，　P. 135

50) Reichenbach, H.：The Rise of Scientific Philosophy,『科学哲学の形成』市井三郎訳　みすず．1954, P. 277

51) Langer, S. K.：Philosophy in a New Key,『シンボルの哲学』矢野万里他訳．岩波　1960．P. 101

52) Russell.：Religion and Science, P. 236 - 237

53) Russell.：Power, Allen & Unwin, London, 1938, P. 257

54) Ayer.：Bertrand Russell, P. 27, 125

55) Russell.：Religion and Science, P. 236

56) ibid, P. 233

57) ibid, P. 237

58) Russell.：Power, P. 284